

アイルランド雑感(元・12・13)

高野武之助(昭11理甲)

アイルランドの話をさせて頂きます。私は全くプライベートな家庭の事情で、去年の九月から十一月迄、今年の四月から十月迄合計約十か月程、アイルランドの主としてダブリンで生活しておりました。別に何も仕事はないので、孫の守をしながら、向こうのテレビを見たり、あるいは名所を觀てまわったり、又近所の人をお茶に招いたり、招かれたりというようなことをしながらアイルランドの生活を味わってきたわけでございます。このようにアイルランドの人達と交際しておりますと、アイルランドの人はイギリス人が非常に嫌いなことが分りました。

何でアイルランドの人がイギリス人が嫌いなかと疑問に思つたんですが、よく考えますと、大体「隣同士」というものは仲が良くない。朝鮮半島と日本もそうですし、もともとフランスとドイツも仲が悪かった。これは、隣同士はお互いのアラが見え易いという事もあるのかも知れません。しかし、アイルランド人のイギリス人嫌いというのは、相当根深い歴史があるということ

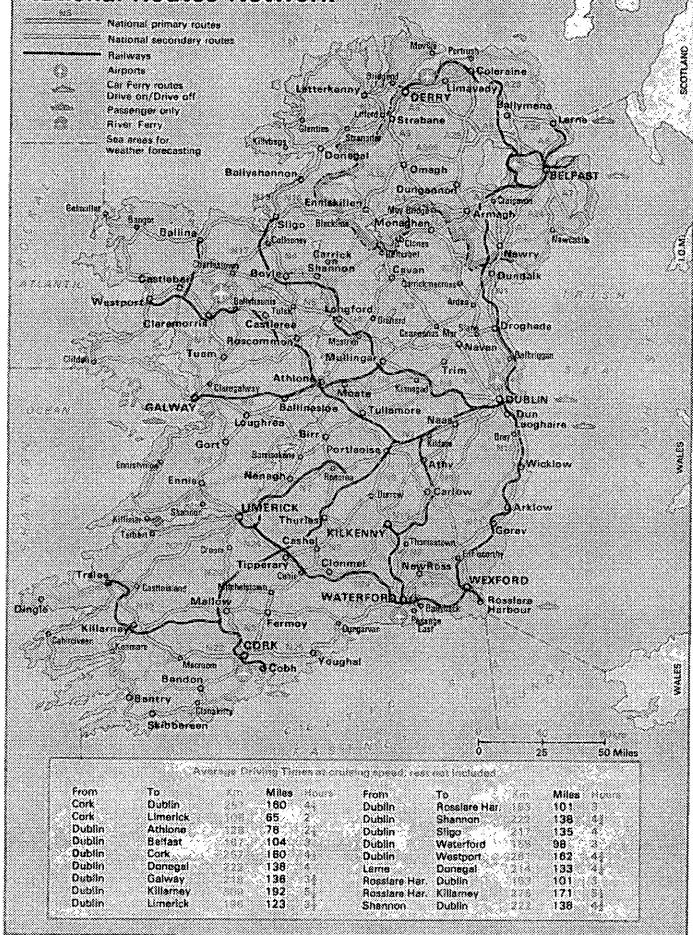
がわかりましたので、その辺を私なりに調べまして、私の独断と偏見をまじえてこれからお話をしたいと存じます。

それで事の正邪は皆さんのご判断にお任せして、私は一応こんな考え方をしているということでご理解願いたいと存じます。それからこれからお話します中には、司馬遼太郎先生の「アイルランド紀行」という本の影響が所々に出てまいると存じますので予めお断りしておきます。この本は週刊朝日に「街道を行く」という随分長い連載がありますが、その中の一部として「アイルランド紀行」というのが二冊の本になって出ているものです。

ではまず初めにアイルランドという国はどんな国かということをご説明致します。皆さんはそういうことはないと思いますが、私の友達の中には「アイルランドというのはどこにあるのや」と知らん人もかなりいますし、「イギリスの一部か」という人もいます。あるいはアイスランドと間違えている人もあります。アイルランドというのは、皆さんにも地図が渡してごさいますように、ヨーロッパの一番西北の端にある島でして、北緯51度30分、西経が5度30分から10度30分というような、位置にある、面積が全部で約八万四千平方キロという、大体北海道と同じ位な大きさの小さな島です。

そこで皆さん既にご承知と思いますが、現在この島の北東部のこれだけ程の部分が（地図で説明）北アイルランドといいまして、これはイギリス領です。この下の方がアイルランド共和国に

National Routes Network



なっております。このアイルランド共和国の面積が大体七万平方キロ、北アイルランドが約一万四千平方キロです。人口も共和国に約三百五十万人、北アイルランドに百五十万人位、合わせて五百万人程の人が住んでいます。今、アイルランドはヨーロッパの一番西北の端といいましたが、E・F・T・Aという「ヨーロッパ自由貿易連合」というのがありまして、それにはアイスランドが加入していますから、アイスランドもヨーロッパとすれば最西北端とは言えないかもわかりませんが、大体場所はお分り頂けたと思います。

それで東西の最長部が約二百七十キロ、南北のそれが四百八十キロ余りで、東海岸のほぼ中央にある首都ダブリンから、大体何処も車で日帰り出来ます。しかし、海岸線は割に複雑でこの西南部辺りには沢山入り江があります。三千百七十三キロという海岸線の全長は、小さな島にしては非常に長い海岸線と思います。東側にセント・ジョージ海峡、アイルランドの人はこれを、アイリッシュ・シー（アイルランド海）と呼んでいます。これを隔て、イギリスのブリテン島があるわけです。島のこういう海岸に近い所に割合に山があつて、真ん中に起伏に富んだ平坦な土地（中央平野部）があり、そして全体が大きな石灰岩の島のような感じがいたします。島全体に湖や池や沼が多く、ものの本によると、八百位の湖や沼があるそうです。一番高い山がこの辺りにありますが、標高は千四十米です。それから一番長い川がシャノン川といって、ここを流れている川ですが、これが三百七十キロ位の長さ。そして一番大きい湖というのは、ネイ湖といつて、

北アイルランドのベルファーストの近くにあります。大体こういう地勢です。

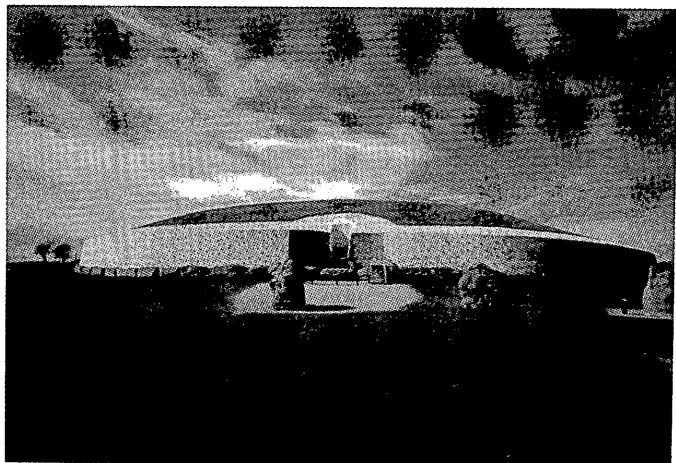
次に気候ですが、先程申し上げた緯度からいいますと北樺太に相当する緯度で、かなり寒いように我々は感じる訳ですが、実は私は真冬は向こうで過した経験はありませんけれども、家族の話によりますとそんなに寒くない、寒暑の差が比較的少ない。夏の平均気温が六・七月で十四度から十六度、冬の平均気温が一・二月で四度から七度です。そうですから、冬も雪がほとんど降らないようです。この気温の暖かい原因はここにメキシコ暖流がずっと流れている影響のようです。その代り雨は多いです。平均降雨日数でいうと、一年三百六十五日のうち、二百十五日雨の日があるという位、雨の日は多いのですが、向こうに実際住んでみて雨を経験してみますと、そんなに大雨は降らない。年間の降雨量を見ると八百ミリ〜千二百ミリですから、日本なんかに比べたらずっと降雨量は少ないのです。しかし、大変天気が不安定でして、陽が照っているかと思うと、ザアと狐の嫁入りみたいに雨が降ってくる。降っているかと思うともう止んでいるという具合で、洗濯物の出し入れが非常に忙しいところです。少しでも雨が降ればその日は降雨日となるので一年の三分の二近くが降雨日となる訳です。

向うでテレビの天気予報を見ているとダブリンの天気が翌日のロンドンの天気になっているようで、これでイギリスの紳士が傘を離さないという意味がわかった次第です。

緯度から見ればかなり北の方に位置しますので冬は非常に陰鬱で、日が短いです。北欧程では

ないにしても午後の三時頃になると薄暗くなって来て、朝も七時ではまだ暗いです。その代り、夏は午後の十一時になっても、明るくて午後五時に会社が終わってから、ゴルフ・ワンラウンドが充分にまわれる位の明るさです。午後の九時といっても西日が晃々と照っているという状況です。それで夏は割に気温も低いし、明るいので、かなり快適な夏を過ごすことが出来ました。

次に歴史について簡単に申し上げます。これによってアイルランド人がイギリス人に対し恨みを持つている原因がお分り頂けると思っています。この島の原住民は狩猟民族で恐らく紀元前六千年頃石器時代にスコットランドからやって来たと推測されています。その後紀元前三千年頃には地中海から別の民族が入って来て、その民族が巨石の文化を持って来ました。あちこち歩いてみますと、ドルメンという大きな石を柱に建てた上に、平らな石を置いたお墓の跡が多く見られます。又、この辺にニューグレンジという所がありますが、ここには、紀元前三千年位の横穴式巨大古墳があります。このようになかなり高度の文明を展開していたようです。そういう所へヨーロッパからケルト人がアイルランド島へ渡って来た。ケルト人というのは、元々ヨーロッパのオーストリアとか、東ドイツの辺に居た民族で、それがゲルマン人とか、デーン人とか、あるいはノルマン人にずつとおされて、最初はイギリスのブリテン島にやって来て、それが更にアングロサクソン等に追われて、一部はスコットランドに、一部はウェールズに残っていますが、遂にアイルランドに彼等の独特の文化を持って移住して来ました。それが紀元前三百年位の様です。



ニュ・グレンヂの横穴式古墳

ケルト人はアイルランドに於て多くの小さな王国をつくって互にこぜり合いをしていましたが、紀元前百年頃には、タラ大王という王様が、小王国を掌握して一つのタラ王国が出来た様です。そういう状態で数百年間割に平和な時代が過ぎた訳ですが、その間にキリスト教が入ります。さて紀元八〜十世紀頃になりますと、スカンジナヴィア半島からバイキング、いわゆるノルマンですが、バイキングが襲って来て、この辺に港を開いて、そこへノルマン人の街を造った。ダブリンにしても、ドロヘーダ、ヴェックスフォードもノルマン人が開いた街です。

ダブリンは、今年が街が開けて千年だということとお祝いのため、ダブリンの博物館にその展示がありました。丁度千年ということになると、九八九年にダブリンが出来たということになります。

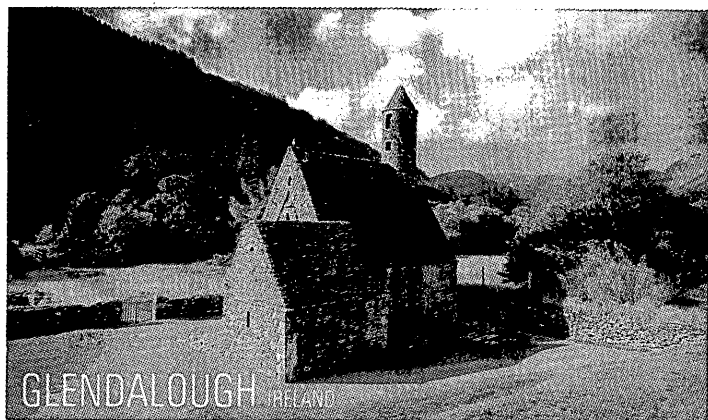
す。そういう風にしてノルマン人が、あっちこっち、海岸線に沿って侵略し街を開いていった様です。その後十二世紀にイギリスがアイルランドに侵攻するのですが、イギリスの歴史については、私はあんまりよく知りませんので間違っていればお許し願います。

イギリスの、このブリテン島は、紀元前後ローマ軍に征服されていましたが、紀元四四九年アングロサクソン族がブリタニアを支配し、次に八五〇年頃からデーン人が侵略を開始、デーン王朝が一〇一六年に出来てかなり栄えていた様です。それをアングロサクソンが又攻め落とし（一〇四二年）、その後フランスのノルマンジーにいたノルマンが、ブリテン島へ攻め上って来て、アングロサクソンを征服し、一〇六六年にノルマン王朝を作りました。それを今度は、アングロサクソンのヘンリー二世が、一一五四年に一応制してプランタジネット朝を作り、一一六九年にノルマンとアングロサクソンの連合軍がアイルランドに侵攻しました。これをアングロサクソン・ノルマン・インバージョンと言っております。この時にアイルランド全体を征服して、戦功のあったいわゆるイギリスの貴族に対し、アイルランドを分割して、領土として与え、アイルランド人を全部、小作人にしてしまったわけです。これが、アイルランドがイギリスに侵略された第一回目のもので、それから後、今世紀の初めまで約七百年余りの間随分ひどい搾取を受けながら過して来たわけです。これがアイルランド人がイギリス嫌いになった第一の原因です。

さて、ここでちょっと宗教の話をしなないと次の話に移れませんので、宗教の話をします。アイ

ルランドには、元々ドルイド教という土着の原始宗教がありました。この原始宗教というのは、他のどこの原始宗教とも同じ多神教で、山の神様、火の神様、水の神様という様に沢山の神々が信仰されていました。そこへ先にもちよつと申しましたが五世紀の初め四三二年にセントパトリックという宣教師が、イギリスから渡つて来て、始めてキリスト教を布教しました。しかし、このセントパトリックという人はまことに賢い人で土着のドルイド教を全然否定せず、一神教のキリスト教を布教するのに、逆にドルイド教を利用しました。それで急速にキリスト教が広まり、アイルランドは熱心なカトリック教国となつた訳です。それでドルイド教の神々は皆妖精となり、水の妖精、森の妖精等アイルランドには妖精話が大量に山あります。

アイルランドの人は、セントパトリックというお坊さんを、日本の弘法大師みたいな感じで非常に崇拜しております。セントパトリック・デーはアイルランドの祝日ですが、今日ではアイルランド人が移住した世界各地で盛大に祝われているのは皆様ご承知の通りです。アイルランドに入つたキリスト教はあちこちの山間僻地に修道院を造つてキリスト教の教理を熱心に勉強し非常に立派な修道僧を輩出して、アイルランドからヨーロッパへ逆に伝道に行くという具合で、ヨーロッパに対するキリスト教伝道の面ではアイルランドは、重要な位置を占めていた様です。しかしながら中世になって段々とヨーロッパに於いてキリスト教が腐敗といひますか墮落してきまして、十六世紀にはマルチン・ルーテルという様な宗教改革者が出て、宗教改革の波が起りローマ



グレンダーロックの修道院跡

法皇の威信も落ちてきました。そういう時にイギリスに於きましては、ヘンリー八世という王様が、自分のお後のキャサリン王妃を離婚しようとして、その許可をローマ法王に願いました。ローマ法王から不許可の返事が来まして、それならば、もうローマ法王の下における必要はないとローマ教会から独立、王はイギリス教会の地上唯一最高の首長である、国王至上主義を宣言、所謂政教一致のイギリスの王制が誕生、ローマン・カトリックと縁を切りプロテスタントとなりました。これをアングリカン・チャーチといいます。日本語で聖公会と呼んでいます。

その後エリザベス女王一世の時に完全な宗教改革を行い、一五五九年にアングリカン・チャーチを確立しました。ところが十七世紀に入りますとそのプロテスタントが行き過ぎまして、ピューリタン、清

教徒といいますが、ピューリタン運動がイギリスに起りまして、その親玉が皆様ご存知のクロムウェルという軍人兼政治家であります。クロムウェルは清教徒を迫害したチャールズ一世を処刑し、王制を廃止して共和制とし、自ら護民官となった男ですが、この時にイギリスは一度共和国になっております。イギリスがこういうふうにはプロテスタントに替りまして、アイルランドは依然としてカトリックで凝り固まっておりますので、カトリック嫌いのクロムウェルが一六四九年に共和国軍を率いましてアイルランドに侵攻しました。そしてこのドロヘダというところでは約四千人、こっちのベックスフォードという港では約二千人と宣教師や修道女、その他女・子供を含む多くの人々の大虐殺をやりました。それから各地のカトリックの教会を破壊して徹底的にカトリックをいじめぬいたわけです。そんな訳でアイルランドの人は非常にプロテスタント嫌いになってしまいました。

その後もアイルランドのカトリックは収入の十分の一をイギリスのアングリカンチャーチのプロテスタントの方へ税金として納めなければならない等と、ずいぶん過酷な政治を強いて、アイルランド人をいじめたわけです。それでその時分の怨念がアイルランド人の中にイギリス人に対して随分あるわけです。

思えばヘンリー八世の王妃キャサリンの離婚という一人の王の浮気が元でイギリスとアイルランドがプロテスタントとカトリックに分れ、それが因でクロムウェルの侵略という痛ましい事件

が起り、数々の不幸をアイルランド人に与え、これは更に四〇〇年以上経った現在でも北アイルランド紛争という凄惨なテロ事件にまでその爪跡を残しています。一人の人間の我儘が如何に多くの人々に不幸をもたらしたか、恐しいことです。そこへもって来て、さらに追いかけるように一つの不幸がアイルランドを襲いました。一八四五年より五十年にかけての大飢饉がそれです。

その頃のアイルランドは主食がジャガイモだったのですが、ジャガイモが病気になるまで、勿論ある程度天候不順もあったのですが、ほとんど收穫皆無になってしまいました。この飢饉によってだいたいアイルランド人が約百万人餓死した。そして約二百万人が海外へ移住したと言われております。その時にずいぶんアイルランド人は今の北アメリカに移住したようです。約百五十万人が北アメリカに行ったと言われております。勿論イギリスにも移住しております。その時にこれは私の調査不十分でよくわかんのですが、あんまりイギリスが助けなかった。その当時一八四五年〜五十年というのはイギリスでは産業革命が始まって、かなり繁栄していた時代だと思ふんですが、余り飢饉に対して援助しなかったのではないかと思われまゝ。イギリスもだいたい狭い国で、余りものがとれないし、食糧はかなり輸入していたでしょうが、それにしても自分達の植民地が大飢饉で餓死者が百万人も出るというような状況になつていても、たいして救援の手を差し伸べなかったようです。それでまたイギリス人に対する怨念が起つています。

しかし私は何故百万人も餓死者が出たか、未だにわからないのです。だいたいジャガイモと

いうのは、南米原産で今のペルーのアンデス山中で作られていたのを、フランシスコ・ピサロというあの辺を荒しまわったスペイン人の親分がこれをヨーロッパへ持って帰ったものですが、割に寒い所に適する作物なものですから、急速にヨーロッパに広がって、アイルランドにはサー・ウォーターローリーという人が一五八八年に持込んだといわれています。それから丁度この気候にも適したし、荒地でも出来るものだから、アイルランドでジャガイモが主食になったようです。しかしジャガイモが病気で穫れなかったということは、他の牧草とか野菜類は、当然、育っていたと思います。牧草があれば牛や羊は育つただろうし、これだけの海に囲まれて湖や池も多いので魚は沢山捕れます。アイルランドではスモークドサーモンは名物になっている位です。

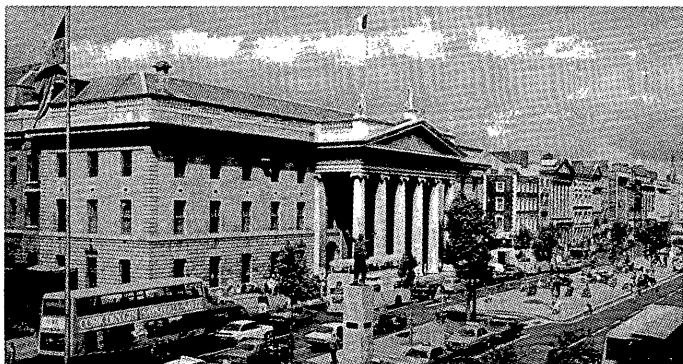
このように肉も魚もあり、野菜類も当然あったと思うんですが、ジャガイモが出来ないだけで、どうして百万人の人が餓死したのか、私は未だに解らないのですが、とにかく七十万から百万人の人が餓死したという事は事実の様です。しかし、アイルランド人の食生活を、ずっと見てみると、かなり保守的は保守的です。新しい食べ物、例えば日本食なんかでも、食べさそうと思うと、なかなか食べない。食糧に関しては、かなり保守的ですが、それにしても、生命にかかわる時に、どうして、そういうものが食べられなかったのか、未だに不思議です。

この三つの災厄。アングロ・ノルマン・インバジョンという最初のヘンリー二世の侵略、その次のクロムウェルのインバジョン。これはアイルランドの人は非常にうらんでいます。そ

れから、その次の大飢饉と、この三つの事件がアイルランドの人をイギリス嫌いにした、大きな原因だと思えます。しかし、その間、アイルランドの人は、易々として、イギリスの搾取に甘んじていたかという、決して、そうではありません。度々、反乱もやっております。特に、アメリカの独立戦争とか、フランス革命とかが刺激になって蜂起しておりますが、全部イギリスの軍隊に鎮圧され、首謀者は銃殺されて、失敗に終わっています。

その後、一九一六年にイースタースター蜂起というのがありまして、これは丁度、一九一四年から第一次世界大戦が始まっておりますから、そういうことも考慮して、今がチャンスということもあったでしょう。ダブリンの中央郵便局を根城にしまして、三月のイースタースターの日に、反旗を翻したわけです。しかし残念ながらこの反乱もイギリス軍にやられてしまつて、指導者は、全部銃殺になりました。このように失敗に終わりましたが、これを契機に国内のあちこちで蜂起が起りまして、約五年間、独立戦争が続きました。これでイギリスも手を焼いたのです。又、一方に於て、第一次大戦の痛手もあったと思いますが、遂に一九二二年にイギリスとアイルランドの間でイギリス・アイルランド条約というのが調印され、アイルランドは自治領として自治権を獲得し、七百余年に亘るイギリスの柵しごみから解放されました。

しかし、その時に北アイルランドがアイルランド自由国から分離してイギリスにつきました。何故分離したかと言いますと、北アイルランドはスコットランドと非常に近く、一番近い所では



ダブリンの中央郵便局

その距離は三十キロ位しかありません。それでスコットランドあたりから、かなり、プロテスタントの人が移住をしていますし、ロンドンの植民会社が、プロテスタントの移住者をつのつては、北アイルランドへ植民をしています。ここに、ロンドンデリーという街があります。ここは植民会社の作った街で、ここへ多くのプロテスタントを移住させております。又、ベルファーストという、北アイルランドの中心の街は工業が盛んでイギリスからの移住者が多く、一九二二年の自由国になった時に、プロテスタントの多い北アイルランドはどうしても、南のアイルランド自由国と一緒にするのは嫌だと言って、イギリスについてしまったわけです。それが、ずーと尾を引いて未だに、北アイルランドの紛争が起つてゐるわけですが、北アイルランドにも所謂アイリッシュのカトリック信者が沢山いる訳で、彼らはプロテスタントから住宅・就職・参政権

等できびしい差別を受けています。この紛争は、このように宗教の違い、こっちはカトリック、一方はプロテスタントです。更に民族の違い、こっちは、ほぼ、ケルト人ですが、一方は、アングロサクソンが多い。そこへもって来て、七百年に亘ってイギリスの植民地として、いじめられた怨念があります。そしてこれらの差別は依然として北アイルランドに残っています。以上の三つの理由で、未だに血なまぐさいテロが頻発しています。

むこうのテレビニュース観ていますと、毎日のように北アイルランド紛争のニュースが出てきます。イギリスにとっても、アイルランドにとっても、癌だと思えます。アイルランド共和国軍というテロ組織がありまして、それに対して、北アイルランドも別のテロ組織アルスター防衛同盟を作っており、お互いに、殺し合いをやっている訳です。さて、アイルランドは、一九二二年に自治国になりましたが、その後、一九三七年にアイルランド憲法が出来ました。その憲法の中では、北アイルランドは、アイルランド共和国の領土であると規定しています。アイルランドは、一九四八年に完全にイギリスから離脱し、アイルランド共和国という完全な独立国として誕生しております。一九四八年ですから、ついこの間のことですが。それから一九五五年に国連に加盟、ついで一九七三年に、ECに加盟しております。

ここで恐らく皆様がご存知ないことをお話します。それはアイルランドという国は、第二次大戦中は中立国だった、即ち第二次大戦に参戦していない、日本を敵としていないということ

す。先程申しましたように、一九二二年に自治国になって未だ大統領はいませんが、首相がおったわけです。この首相がエイモンデ・バレーラと言う人で、彼は一九一六年のイースター蜂起の時には、義勇軍の指揮官をやつて、捕われて銃殺刑を宣告されましたが、彼が、アメリカ生れであつたという理由で釈放され、その後、一九三二―五九年の長い間、首相をやつていました。

丁度、第二次大戦の初期チャーチルは、まだ、アメリカも参戦してくれないし、ドイツからは激しく攻められ苦境に立っていて、バレーラ首相に参戦をせまりました。しかしバレーラ首相は、頑として、言うことを聞かなかつた。イギリスに同調せずと中立を守りました。それで大戦中は、ダブリンには、日本の領事館があつたし、領事も二人、ここに駐在しておられました。

そんな訳でアイルランドは非常に親日的です。これは、真偽の程は分りませんが、第二次大戦が起つて、マレー沖の海戦に於て、日本海軍の雷撃機が、英国の新鋭巡洋艦プリンス・オブ・ウェールズ他一艦を爆沈しました。このニュースが伝わると、アイルランドの人は非常に喜んで、そうです。それから、パーシバル將軍という人が、当時シンガポールの司令官をしておりましたが、彼は一九一六年のイースター蜂起の後、あちこちに反乱蜂起が起つたわけですが、その鎮圧のためイギリスから派遣されて、ここにコークという街がございます。北アイルランドを除いたらアイルランド共和国で二番目に大きい街で、人口が二十万弱ですが、ここの司令官としてやつて来まして、コークの人を非常にいじめました。そのパーシバルが今度、大戦が起りますと出世

して中將になり、シンガポールの司令官になっていたわけですが、日本の山下將軍が率いる陸軍が、マレー半島を南下して、ジョホール水道を渡りシンガポールを陥落させました。そして、パーシバル將軍を前にして、イエスカノーか、とやったわけですから。このニュースが、コークへ伝わりますと、コークの人は大喜びしまして、山下將軍に祝電を打ったという話があります。

それ位に、たとえ第二次大戦で結果的に日本が負けても、あの憎いイギリスに、一矢を報いてくれた、ということで、アイルランドの人は、非常に親日的であります。私達が、むこうにおりましても、非常に居心地のいい国です。この頃は、海外へ行っても、イギリスでも、フランスでも、アメリカでも治安が相当悪い様ですが、アイルランドは北アイルランドを除けば非常に治安が良い国です。それで日本の企業も、現在、北アイルランドは知りませんし、恐らくないと思いますが、約二十社程、企業進出をしております。西北部のバラナという所に旭化成が、ダブリンの北方ナーバンの近くに日本電機（NEC）が工場をもっております。それから、ダブリンには、山ノ内製薬が出ておられますし、ここにアークローという街があります。ここには、ノリタケチャイナという焼き物の会社が出ています。その他、清水建設、富士通、オリックス等が進出しております。一つ面白いのは、キルデアという所に、駿台学園アイルランド校という学校法人が進出しております。

現在は、まだ日本から来ている高等学校の一年生だけで、十三人しか生徒はおりません。それ

に対して、先生は三十人位おられる様です。こんな事をお話していると未だお話したい事は沢山ありますが、与えられた時間が段々と少なくなって参りました。

今までお話しましたように過去に三つの大きな災厄がイギリスによってアイルランドに加えられた。これがアイルランド人をイギリス嫌いにしたというのが私の独断と偏見による結論ですが、その反動と言いますか、今、申しました様に、非常に親日的であります。

反面イギリス人は、非常にアイルランド人を見下げております。アイリツシュというのは、怠け者で、雄弁家、無気力で、幻想家、空元気ばかりで仕事をしないという評価をしております。

しかし、彼等をそういう性格にさせたのは、私は、イギリス人ではないかと思ひます。七百年もの長きに亘つていじめぬかれたら、誰でも、やっぱり人の目がある時には、働いているけれども、ちょっと目がなかったら、サボろうという様な氣になるのは、これは人間の本性ですから、そういう風な性格にして、口先ばかり上手にさせたというのは、これは、やはりイギリス人が、そうさせたのではないかと思ひます。現在イギリスには約八十五万人程のアイルランド人がいるそうですが、大体単純労働の日雇い労働者が多いと聞いています。

しかし、又一方、アメリカでは、アメリカ国民の本筋というのは、ホワイトのW、アングロのA、サクソンのS、それからプロテスタントのP、と頭文字をとってWASPというのが、アメリカ国民の主流となっています。そういう中から、アイリツシュ・カトリックのケネディが大統

領になったということは、大変な大事件です。それを現在アメリカに四千万人いるといわれるアイルランド系の人々の力で、ケネディが大統領になっております。ケネディの出身というのが、大体、このウォーターホードの近くで、ここからケネディのおおじいさんが一家を連れてアメリカへ移住したのです。現在、ここに、ケネディ・メモリアル・パークという広い公園が出来て、その記念館には、ケネディ家の系譜等が陳列してあります。

最近辞めたレーガンもアイリッシュです。しかし彼はプロテスタントです。ケネディとか、レーガンとか、あるいは、マクドナルド、マツカーサーとか、オブライエン、オハラとかは、大体ケルト系の人の特徴のある名前です。それはケルト人の多いイギリスのスコットランドにもそういう名前がかなりあります。ウェールズにもあります。勿論アイルランドにも沢山あります。マツク何々という様な名前は私がダブリンの電話帳で調べましたら、四十八頁に亘ってありました。ケネディという名前も約九頁位ありました。レーガンはそんなに多くありませんでした。このような名前の人はアメリカでは各分野で随分活躍しております。更にカナダやオーストラリア、ニュージーランドにも、沢山アイルランド人が移住しております。オーストラリアの一九二九年から一九四九年の間に首相になった人、七人の中の六人までがアイルランド系であります。

こういう風に、オーストラリアに於ても、ニュージーランドに於ても、あるいは、アメリカに於ても、アイルランド人は演説が上手なのでかなり政治面で活躍している人が多い様です。まだ

政治とか言語教育とか産業とかお話したい事は沢山ありますが、与えられた時間もかなりオーバー致しましたので、この辺で終らせて頂きます。

長時間ご静聴有難うございました。

(元日本除虫菊研究所々長)